

問 13

司馬遼太郎しばりょうたろうの本をよく読んだ後、筆者の考えはどうになりましたか。

世の中には、水に浮かぶ人間と浮かばない人間の2種類があるようだ。で、私は後者。要するに、ろくに泳げない。だから、海やプールは極力きき避けて生きているのだが、この夏は、もうしょ猛暑に負けて、近所の公営プールに行った。水に入ったのは何年ぶりだろう。

4、5歳の子が、ばた足の練習をしているのを見て、自分もやってみようと思い立った。ビート板をつかみ、体を伸ばして水をかけた。すると、やはり足からじわじわと沈んでいく。「沈むはずなのに」と首をかしげる家族に、先ほどの「人間2種類論」を披露ひろうし、浮かばないタイプは「人間としての密度みつどが高いからだ」などと解説してみた。まあ、説得力はないようだった。

そんな折、司馬遼太郎しばりょうたろうの本を読んでこれだと思った。「水底までずっしりと沈んでしまうほどに自我じがの目方が重い」という表現を見つけたからだ。大作家の力を借りて、自分の説を強めるつもりだった。ところが、よく読むと、自尊心ばかりが強く、鼻持ちならない人間を評していることが分かった。なるほど。もう少し、浮かぶ努力をしてみようかな。

(毎日新聞 2004年8月23日より)

1. 自分が浮かばない人間であることを再確認した。
2. 「人間2種類論」が正しいことを確かめられた。
3. 大作家の力を借りて家族を説得しようと思った。
4. 浮かぶ人間になるための努力をしようと思った。